

## 二、貧民の子供史

### 一 貧民のたくましさ

僕が生活した炭鉱というのは非常に独特な社会です。しかも北海道の炭鉱は特にそうです。

だいたい炭鉱の風呂は毎日坑夫用に沸かしますけども、そこはイモを洗うようにゴシャゴシャになって、それで朝から晩まで沸いているんです。つまり一番方、二番方、三番方と三交替制でくる人もいます。このように三交替制ですから、一日中風呂が沸かされているわけです。ですから、午後の風呂が開くのは二時か三時ごろでしたからみんなして行くんです。そうすると一番方から上って来た、真つ黒に炭塵をかぶったおじさんたちが帰って来ましてですね、そういうおじさんたちと入ってますと、入墨をいっぱいしたですね、唐獅子牡丹か何か分かりませんが、ものすごいのをした人がいるわけです。とにかくいっしょに入っているとそれだけで恐くなるような感じのです

ね。だけれども僕らもそれに負けてられませんから、風呂は恰好の遊び場ですからね、そこで潜ったり、川からどじょうを取って来て風呂に放したりですね(笑)。そういうだじな場所なんです。それともうひとつ風呂というのはですね、これはだじな情報交換の場なんです。僕らの炭山ではひとつの風呂にくる人口というのは、千人から千五百人くらいです。ですから千五百人分の情報、風呂はただですから毎日来ます、たいてい風呂に行けば僕らの住んでいる所で起こった事というのは確実にわかるわけです。誰それと誰それが駆け落ちしたとか、誰それが裏山で強姦されたとか全部わかるわけです。ですから風呂の中に入って行きますと、グワンという音がします。これは何かという、赤ちゃんが泣き叫ぶ音、隣りの奴としゃべっている音、二、三メーター先の奴とでつかい声でしゃべっている音、あらゆる声が一つになって風呂へ入って戸を開けるとグワンという感じなんです。そのぐらい情報がこまやかに提供されるんです。風呂というのは、炭山ではそういう位置にあるんです。

で、又僕らの住んでいた所がひどい所です。六畳と四畳半なんですけども、産めよ増やせよでもってどんどん増やされた子供達がいるところですから。中には子供が一ダースいたという人もいたんです。あるいは、七人、八人、十人というのはよくあったケースです。僕のとこなんか子供が四人の六人家族ですから、まだまだ少ない方です。それが六畳と四畳半にワツと詰まってるんですから。蒲団なんか少ないですから。あっても敷けませんから。だから一枚蒲団を敷くと、上から二人下から二人横から一人づつと入れれば六人寝れるわけです。しかもその蒲団だって小便臭くなつてますから

ね。それに綿がとび出してますし、めっちゃくちゃな蒲団なんですけども、どこの家でもそうなんです。そういう生活なんです。

着る物つたってなんにもないわけです。僕なんか小学校の二年のときまで姉のセーラー服を着てたです(笑)。

それで靴下ですけども、北海道は雪が降りますから必需品なんです。その当時毛糸があれば編めるんですけども、毛糸がないわけです。で、人絹でも何でも破つたやつを、紐にして縛っていくんですけども、長い紐を作りましてね、その紐でもって手編みしていくわけです。だから、ないよりはましですけども、あまり暖かくない。しかもその靴下の上にはく長靴がないんです。これもまた雪が多い所では必需品なんです。だけど長靴がない。だから夏中はいた底のひつつぶれた、踵かかとの底がテカテカにすり減つたやつをはいてるわけです。そうすると、まず最初にやられるのは靴下なんです。ただでさえ人絹のピラピラですからね。このぐらいの大きさのお月さんが出るわけです。で、オフクロに頼んで修繕してもらおうんです。でも三回ぐらい修繕してもらおうと、こつちの方も頼みずらくなく、オフクロの方も面倒臭くなるんです。それでそのままにしておく。

でも僕らの所は、山のテッペンから下まで一キロほどソリの恰好のポプスレー場になるんです。ですから自分で作ったソリで滑るわけです。でもカーブがありますから、その所は踵でもってブレーキをかけないと曲り切れないわけです。それを踵で曲がるうにも靴がないわけですから足そのものです。だから初め霜焼け程度だったのが、だんだんかた皮かわになつて、パツカリ口があいてそのあい

た口の所から血が出てきたりですね。それでもソリに乗るのが面白くつて遊んでいたんです。

それから靴がないでしょう。だから炭鉱で使うベルトコンベヤーのベルトでね、足袋を作る型に合わせてナイフで切つて、針で縫合せて簡単な靴を作つたり。とにかくさまざまな工夫をしながら着ていたわけです。

それから食う物がたいへんだつたです。そのころに育つた人は、みんな同じだと思えますが。本当に僕は今でもですね、衣食住のなかでも何が一番だいじかという、食うもんですね絶対に。断乎、食うもんです。これは食いたくつて食いたくつてどうしようもないんです。それでも僕はまだよかつたんです。小さかつたから。末っ子ですから一番先にくれるんです。

でも、上の兄貴というのは十五歳から炭鉱に入ってますが、それなのに日の丸弁当さえて行ってけないわけですよ、米がないですから。自分で肥こを運んで作った、カボチャばかり食つてる。カボチャの中にポツンポツンと米粒が入ってるわけです。それでも食えればよかつたんですけどね。

それでカボチャばかり食つてるでしょ、そうするとだんだん顔中体中黄色くなつてくるんですよ。でも黄色くなつても僕らはたくましかつたんですよ。どこがたくましかつたかという、黄色くなつたのを誇り合うわけです。どっちが黄色いか、というんですね。それで手をキツチリと握りますと血の気がぬけるでしょ。そうするといつそう黄色く見えるんです。どっちが黄色いか競争するわけです。「ホッカイドーのカボチャ色」とやるわけです(笑)。これは非常にたくましかつたんですけども(笑)。

ですから僕は、食える物なら何でも食ったですね。炭鉞ですから、山の中ですだからね、春には山菜はもちろんのこと、秋のキノコももちろんのことです。なんというかスツカンコのたぐいでね、正式にいうと虎杖とらじょうかな。葉が煙草にもなったやつです。あの虎杖の茎をですね、スツパいんですが、その皮をむいて食うんです。

他に名前なんかわからないけども、ただスツパいだけとかね、スツバくも辛くも甘くもなんともないけども、食っても死なないものとか。そういうものを先輩からおそわるわけです、子供同士。

それからこんどはクルミ。実はもちろん食べます。春からクルミの皮をペロペロ嘗めるんです。嘗めると辛いんです。辛さを楽しむんですね、辛口なんです(笑)。そうしている内に、舌が赤くなってくるんです。クルミの樹脂が何かでね。で、どっちが赤いかというのを競争するんです。それに赤くなるだけでなく、だんだん舌が荒れて割れてくるんです。割れ目ができます。どっちが割れ目が大きくできてるか、とかですね(笑)。

## 二 美意識の誕生

まあ、食うことでガツガツしてましたけども、しかし、だからといって僕は精神的に貧しかったわけじゃないんです。美的感覚も十分にあったわけですよ。

たとえばクルミの枝をですね、十センチぐらいに切って七分目ぐらいの所に切れ目を入れて、節

をトントンと叩くんです。叩いてるうちに、樹皮が刀の鞘のようにスポンと抜けます。それに底を付けて入れ物を作るわけです。その中に塩を入れておくんですよ。そうするとですね、次の日、実に綺麗なバラ色の塩ができるんです。間違いないから試しにやってみなさい。しかし、だからといって塩が甘くなるんじゃないですよ。やっぱり塩っぱいんだけども、ただ色が綺麗なのを自慢したくってやるわけです。俺のが綺麗だ、お前のが綺麗だとかね。

それで、これは食うことに関係がありますけども、甘いものがなんせないわけです、今ごろ北海道では、沢庵とか鯨漬けとかよく漬けるんです。そのとき大根洗いをするわけです。で、オヤツなんか何もないときですから、オフクロに大根のあい所をですね、皮をむいてもらうんです。これが梨のように甘かったんです、昔は。そう感じたんです。今はだめですね。そうかと思つて食つてみたけど全然だめです。

それから春さきにですね、イタヤ楓いんげんという大木があるんです。それを春さきに鉋で削っておきますと、そこが湿ってきて汁が出てくるんです。そこにペン先とか釘を刺して、あと、ピンを宛てがっておくと、タラタラ落ちてくるんです、液が出てくるわけです。それだけ飲んでも甘いんですが、それでは甘さが足りないというので、家へ持って帰って鍋で煮詰めるんです。そうするとエキスだけが残りますから、それがまた、気の遠くなるぐらい甘いんです。それを毎日取りに行くんです。三月の末から四月の初めぐらいまで。ところが、このイタヤの蜜というのは、ちょうど色が小便の色と似ているんです。仕掛けを作れば、あとは尻滑りをして遊んでますから、だから分らないん

ですよ。で、帰って見てみたら、おっ溜ってるな、と思いつつ帰るわけです。ところが家に帰ってですね、煮詰めているうちに分かるわけです(笑)。そんなことだとか、本当によくあったんです。

その帰りに、山桜のまだつぼみの堅いのを折って来て家の中に置いてくと、まもなく一週間ぐらゐると花が咲く。外が雪なのに花が咲く。これだつて非常に美的感覚がなければできないことです。それから福寿草を採ってくるとかですね。子供でもそういう遊びをしていたものです。

それから、食い物の話で関係のあることをいっておきますと、僕らの所には進駐軍が来ましたが、それでも、視察に来ただけですから、ガムやチョコレートを見せびらかすということはなかったけれども、ただ確実にガム文化というのは入って来たんです。進駐軍が入って来たら、なしてガムに憧れたかというんですね、ガムというのは、なにも腹には入らないけれども、口が動いているでしょ。それだけで腹が減っているのが紛れるんです。本当は紛れないんだけど、紛れるような幻想があるんです、ガムには。あつたんです、そのころ。だからガムに憧れて、で、僕なんかも一円二十五銭のガムをですね、オフクロにねだつて買いに行くんです。しかしそうそうオフクロもくれないですから、金をかっぱらつても買いに行くんです。それであとから発見されて、オフクロに、この手が悪いといつてツネられたりですね(笑)。そんなことをしても欲しかった。

だから、一旦ガムを買うとなかなか捨てられなかつたんです。当時のガムというのは全然ふくらないガムなんです。ただ伸びるだけなんです。それで初めは硬いんですよ。ところが、だんだん

唾液の暖かみで柔くなつて咬めるんですよ。そのガムを伸ばすでしょ。風呂の中に行つて対角線状に伸ばしたりね。風呂の中では増々伸びがいいですからね。夏なんかは裸で遊んでますから、体にグルグル巻いて、はずしてまた食べたりますね(笑)。

それから、ガムの貸し借りというのがよくありました。誰かが咬じつていると、ちよつと貸せというんです。朝学校行くときなんか、ガム咬じつて行くでしょ。そしたら誰かが貸せ、というので貸してあげるわけです。で、又貸しするわけです(笑)。あつちこつち又貸ししてですね、二十人ぐらゐのところが回つて、俺のどこいった、という、あの辺でないか、といつて返ってくるわけです。また僕は咬じるわけです。

そうやって長いこと保つわけです。で、寝るときは、皿の上ののつけて寝るわけです。ところが、子供ですから、眠たいですから、だから口の中に入れたまま眠るときがあるんです。そしたら次の日は、ピタッとこの辺(頭)にくっついてですね、それでガムも一卷の終りですけどね。

あと麦粉でガムを作るとか、いろいろな努力をしましたが。そんなような生活をしてきたんです。

### 三 知識人文化との出会い

で、その後もですね、町場へ出ても、オヤジは昔取つた杵柄でもって餅菓子屋をやりますけども、

それも二、三年でやつぱり潰れちゃう。

結局その後は、オヤジは夜逃げするわけです。今度は僕らが大きくなってますから、夜逃げするときは単独で夜逃げするわけです。まあ、単独ではなく別の女と二人だったんですけども、オフク口の方は取り残されちゃって、じゃ私は京都へ帰るといつて帰っちゃったんです。そして残されたのは、子供だけ四人なんです。子供四人だけで、兄弟だけで生活することになります。

初め兄貴は、長男というのは、行商をやります。小樽へ行つて魚を仕入れて来て、農家だとか炭鉱地帯をまわつて、魚を売るんです。それで生活を立てていた。そのうちに友達ができて、行商よりもっといい儲け方がある、ということになってお祭りまわりの大道商人になります、兄貴は。

そうなりますと、北海道の祭りをあっちこちまわつて歩く大道商人の人達の家に来るわけです。うちようどそのころヒロポンという麻薬が流行つてまして、うちが溜り場になっているわけです。うちで毎晩のように、寄つて来る人は、お茶を飲んだコップに、水を汲んで来いと命令するわけです。僕は小さかったですから、水を汲んで来ますと、そこで注射器を洗つては打つてるんです。しまいは顔が引きつって、どうしようもなくなる人もいますけどね。僕の兄貴なんかも、少し打つていたようです。けども僕らの生活は、その兄で成り立っていたわけです。

で、その後、オフク口は京都から帰つて来て、病院の付添婦だとか飯場の飯炊きとか、それから姉は病院の炊事婦ということで、生活してきてるわけです。

僕は、とにかく学校へ行きたいと思ひまして、大学へ進んだんです。このへんから秩父事件に関

係してくるんですけども。

大学へ進んだとき、特に専門部へ進んだときに、西洋史の方ですが、最初に感じたのはものすごい違和感だったんです。僕は大学へ行つて、歴史を勉強しようと思つたのは、僕は非常に貧しかったですから、貧乏人の歴史、あるいは自分と同じような生活をしてきた人の歴史、そういうものを勉強したい、それからそのころマルクスなんか読んでいて、疎外だとか唯物史観だとか、そういうことを考えてましたから、それに関係のあるものを勉強したい、しかし全然関係ないわけです。実際やつてゐることは。

研究室へ行きますと、置いてある本はみな外国語で書かれてるんです。僕は外国語というのは全然だめなんです。今は少しいいですけどね。そのころは全然だめなんです。それなのに西洋史を選んだというのは、これはやはり僕の中のモダニズムなんです。ヨーロッパへの憧れなんです。結局西洋史の世界というのは、なんとというか、まったく僕と別の世界、雲の上の世界といえますか、そんな世界だったんです。

僕は、英語はだめですし、フランス語もだめなんです。両方とも最低点で通つてきただけです。しかし、それなのに専門学部に進むと、いきなりゼミナールでドイツ語だ、というわけです。先生がいうには、この研究室へ来たならば、英独仏の三ヶ国語は最底限マスターしてもらわなくては困る、というわけです。へんな所へ来てしまったなアと思いましたけど、とにかくやりました。けどもその反面で、違和感と同時に、僕自身のコンプレックスがありました。つまり僕の育ち方、

生まれと育ちと、そういうものがこの学問の世界と全然かけ離れている。僕自身はごく単純にですね、こんなことをやりたいと思っただけで、それが満されるようでもない。まあ、非常にあれこれ者えました。ともかく、なんとかやりました。大学院にも行きました。大学院に行つて違和感もだいぶなくなりましたけどもね、やっぱり、でもやっぱりそれは強烈に残つてたんです。僕のやりたい歴史学というのはこんなもんじゃない。歴史つてこんなもんでないはずだ。いつでもそういう疑問があつたわけです。

でも、大学院を了えると、先輩達を見ても、その後研究者とか大学の教師になつていくわけです。そうしますと、僕はこの違和感というものを、自分の中でもって誤魔化してでもいいから、なんとかして先生達の求めるような論文を書いて、やがて大学の先生と呼ばれるようになってみたいなアと思う気持と、しかしまてまて、僕はやっぱり貧乏人に育つたんだ、僕がそんなことしたら、僕のこの考えはどうなるんだらうか、いつでも、そういうジレンマの中で、学生時代、大学院時代を過ごしてきたわけです。